

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520170

研究課題名（和文）デジタル技術導入以後の映像表現に関する欧米における理論的言説の調査分析

研究課題名（英文）Research on Theoretical Discourses in Western Countries about Image Expressions after the Introduction of Digital Technologies

研究代表者

北野 圭介 (Keisuke Kitano)

立命館大学・映像学部・教授

研究者番号：60303096

研究成果の概要（和文）：

New Media 研究をはじめ新しい研究領域の摂取と批判的検証を、画面の意味論、映像と身体との関係、映像における世界理解形式の局面に焦点をあて、また、映画的映像論とモニターの映像論を対比させながら考察をおこなった。また、そうした考察から、表現媒体の力能が確定されず、他媒体との交渉のなかで変容するという間メディア性という概念を構築し、映像を用いる現代芸術の解釈に適用する可能性を探った。

研究成果の概要（英文）：

In this research project, through examining theoretical discourses in new media studies and analyzing the similarities and differences between analogue media and digital media, I explored three questions; of the significance of the visual image, of the relationship between the visual image and the body, and of the form of the understanding of the world. In doing so, I also attempted to construct the concept of the trans-medium, considering its theoretical possibilities for analyzing visual expression and its applicability to contemporary artworks employing visual images as well.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：映像、芸術学、理論、ニューメディア、デジタル技術、表象文化論

1. 研究開始当初の背景

映像をめぐる新しい事態に対して、欧米各国では、新しい研究領域が開拓され大きな成果をあげつつある。「ニューメディア New

Media」研究（欧州では「Science of Image」と呼称されることもある）という領域であるが、それは、哲学、芸術学、認知科学、心理

学、社会学、情報科学、メディア論などの分野を横断的に涉猟しつつ、目覚ましい成果をあげている。デジタル化という技術的革新を通過するなかで、映像領域を中心として、文化現象全般がどのような変化を蒙りつつあるのかという問いを中心にすすんでいる研究領域である。広く、メディアと人間存在（そして社会）との関係をより根本的なレベルから調査、分析し直そうとする射程をもつものであるとさえいえる。この、まさしく文理を融合した新しい研究領域は、クリエイティブ産業とも呼ばれる新しい経済領域はもとより、各国の文化政策の新しい局面においてまで、さまざまな影響を与えてはじめてきている。

他方、オーストリアのリンツで毎年開催され、新しいタイプの芸術祭として世界的に注目集めているアルス・エレクトロニカが、「コンピューターはメディアである」という宣言をおこなって以来、メディア・アートの領域が活性化しつつある。こうした実践レベルでの新しい展開は、先に示したニューメディア研究と勢力的に連動し、人文学分野の学者と自然科学の研究者が交流するなかであらたな知見を加速度的に生み出していた。

だが、これらは日本での撮取が本研究プロジェクト申請時においてじゃ限定的な撮取しかなされておらず、申請者はそうした現状を踏まえ申請時前にすでに論文「ニューメディア、オールド・メディア」（「アメリカ研究」）をはじめ紹介論文やサーヴェイ論文を发表し、さらには往時（2006年および2007年）にこの新しい知の理論的可能性に関する発表を国際会議（Creative Industry Conference, Germany, 2007 や Cairo International Festival of Experimental Theatre, Egypt）などでおこない、同じ関心をもつ研究者の国内外のネットワークの

構築もおこなっていた。

他方、メディア研究や芸術実践の新しい展開の撮取だけでは、新しいメディアの実態や可能性の検証に十分なものではないという認識のもと「アナログ」映像の典型であった映画についての研究成果や絵画をはじめとする視覚文化に関する研究成果との比較検討もまた不可欠と考え、申請時まで申請者がおこなってきた映画研究をはじめとする蓄積との接続の可能性も検討する必要があるとの認識もあった。

こうした背景をふまえ、申請者は日本における本格的なニューメディア研究を理論的に整理する研究を組む方向が生まれてくることとなっていた。

2. 研究の目的

デジタル技術を用いた新しい映像の様態のもつ意味を、欧米で近年隆盛を極めているニューメディア研究の言説分析を中心に、ひろく表象文化論的な視点から検討すべき理論上の問題点を整理すること、別言すれば、デジタル化を経て大きく変容しつつある映像文化の実態を表現形態上の変容の諸特性の抽出に焦点をあてながら分析し整理すること、それが本プロジェクトの課題であった。

さらに具体的には、

- ① 近年欧米各国で急速に発展し大きな成果をあげつつあるニューメディア研究の批判的検証、
- ② 新しいデジタル技術を用い多彩な点隗を示しつつあるメディア・アートの調査研究、
- ③ 20世紀の映像（映画的な映像）との比較分析

といった分析視角を通して、今日のデジタル映像（モニター的映像）の諸特性を同定し明らかにすることが、構想の骨格であった。

これを踏まえ、成果目標は、以下のとおりものとして予定していた。

1) New Media 研究をはじめ新しい研究領域の成果の本格的な摂取と批判的検証をおこない見通しのよいかたちで整理する

2) 次の三つの局面に焦点をあて検討すべき理論的な諸問題を抽出する

- ・画面上で立ち現れる映像の形態およびその意味作用のメカニズム
- ・身体と映像の関係性
- ・映像に映し出された世界理解形式

これら以上の三つの局面において、映画的映像論とモニター的映像論を対比させることで、新しい知見を浮き彫りにすること、それが本研究における目標であった。

3. 研究の方法

主として、次のようなかたちで本研究はすすめられた。

- ・先に記した「画面」「身体性」「像世界理解形式」に関連する文献資料の調査と精査
- ・関連する映像作品の現地調査およびその整理と考察
- ・国内、海外における関連する研究者へのインタビューおよび研究レビューへの依頼である。

4. 研究成果

申請者は、本プロジェクトが開始される直前の2009年1月に、ニュー・メディア研究の言説を、とくに「画面」「身体性」「像世界理解形式」という理論面に注目し整理する仕事を著作『映像論序説 デジタル／アナログを越えて』（人文書院、2009年）を発表し結実している。ついては、この著作の成果とこの仕事に向けられた各方面からの評価を踏まえ、「画面」「身体性」「像世界理解形式」をより作品実践面からアプローチし理論

的に整理することが、本プロジェクトの基本的な方向性として再設定されることとなった。以下は、こうした方向からすすめられた成果報告である。

2009年度のプロジェクトの実施と成果は以下のとおりである。第一に、メディア・アートを中心に、デジタル映像を扱った表現について、関連文献を収集、調査研究をおこなった。第二に、カールスルーエ(ドイツ)のZKM、リンツ(オーストリア)のアルスエレクトロニカ・センター、ロンドン(連合王国)の映画研究所、2009年ヴェネチア・ビエナーレ、パリ(フランス)の芸術・技術博物館など、デジタル映像表現の最先端の成果を収集、評価、展示する欧州の主要な美術館、博物館を訪問し、現地調査をおこなった。

これらにより、デジタル映像表現の今日の状況を観察・分析するとともに、現状の課題について理解を深めた。成果としては、以下のものをおこなった。まず、横浜国際映像祭におけるカタログの一部を執筆、また同映像祭のシンポジウムにおいてシンポジウム「ハイブリッド・メディアとは何か」へ参加などをはじめ、次頁に記載したような論文、学会、書籍による発表をおこなった。また、表象文化論学会第4回研究発表会において、その成果の1部を発表した。東京大学と東京芸術大学が共催した「メディア・アート」をめぐる連続シンポジウムの第二回(10月10日)に基調講演者として参加し、このプロジェクトの成果を発表した。

2010年度(東日本大震災のため一部2011年度に実施)においては、デジタル映像作品における「可視性」という問題系の観点から、理論的調査と現地調査をおこなった。

理論的には、ニューメディア研究や現代哲学を中心に関連する理論的言説を調査し整

理することを通して、デジタル映像の表現の力能をめぐる「可視性」をめぐる概念分析が改めて必要とされてきていることをあきらかにした。

実地調査では、デジタル映像を用いた表現作品（メディア・アートなど）を、作品を支える展示形態（物理的支持体やセッティング、解釈的枠組み）との運動の関係について調査をおこないながら、可視性を支える具体的な実践的条件について考察した。

これらを通して、媒体の力を固定化された固有の表現力ではなく複数の特性を混在させるものとして位置づけ直す問題提起をおこなう論文「トランスメディア・エスティック」、『思想』4月号所収、岩波書店、2011年）を発表した。とりわけ、フィオナ・タンやアルフレッド・ジャー、ジョン・ウォールなどの作品においては、媒体における表現力が、従来予想されていた形態から逸脱する仕方で、仕掛けが施されており、そうした仕掛けを十全に設置するために、展示がなされる空間や時間の形式にアーティストが積極的に関わることを確認した。

こうした作家がとる方向での媒体の可能性の実践的探求を、デジタル技術が実現した複数の既存表現媒体の統合といった意味合いでの間メディア性という観点からではなく、むしろ、表現媒体が潜在的に抱え込む不確定な表現力を理論的に救い出そうとする間メディア性という概念において、理論的に定式化し、現代芸術論へとつなぐパースペクティブについても考察をおこなった。

2011年度は、昨年度までの調査研究の成果をふまえ、デジタル映像を用いた作品群、とりわけ先端的なものとして評価されることの多い作品群を中心に、可視性の多層的な形式についての考察をおこなった。とくに、展示の既存形態に対して批判性をもった新たな

作品形式という問題設定をおこない、調査をすすめた。

そうした考察のために、まず、理論的準備として、次のような二点を中心に考察を踏まえ実地調査を踏まえることが理論的な準備として整理された。すなわち、1) 映像を用いた作品に関わる、視覚経験の水準だけでないより広い観点からの鑑賞経験の分析、2) 鑑賞経験に関する歴史的なスパンを踏まえた鑑賞経験の形態の考察、である。

これをふまえ、先端的とされる作品群の実地調査および理論的文献の収集と考察をおこない、次のような結論を導きだした。

まず、映像を用いた作品は、視覚だけでなく多様な感覚器官の作動を狙っている場合、さらにはそうした多層性を踏まえた展示演出をおこなう場合が少なくなく、マルチモーダルな経験構造の観点からの分析が必要であるだろうと判断された。

一方で、しかし、そうしたマルチモーダルな経験構造は、歴史的な変遷において考察する必要があると思われる。つまり、デジタル技術以前の芸術作品に対するマルチモーダルな展示の試みを分析し整理し、それらとの比較において、デジタル映像を用いた作品の意味作用構造の厚みのある分析が可能になるであろうと結論された。実際、欧米においては、古代期や中世期の芸術作品を、デジタル技術の十何の使用により、そのマルチモーダルな体験様態を復元する試みも活発になされてきており、それらを参考にしつつ、より踏み込んだ考察が必要であろうと判断された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

1) 北野圭介 「トランス-メディア/エステティック」、「思想」、巻1044、査読無、岩波書店、2011年、53-78頁。

2) 北野圭介、研究ノート「可視性と展示」、「立命館映像学」、立命館映像学部映像学会、第4号、査読有、2011年、75-81頁。

3) 北野圭介、研究ノート「可視性と展示(その2)」、「立命館映像学」、巻1044、査読有、立命館映像学部映像学会、2012年、印刷中。

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北野 圭介 (KEISUKE KITANO)

立命館大学・映像学部・教授

研究者番号：60303096